

JAえちご中越 さんとう地域「こしいぶき」栽培暦

月

日

出穂前後日数

4月

5月

6月

7月

8月

9月

5

10

15

20

25

5

10

15

20

25

5

10

15

20

25

5

10

15

20

25

5

10

15

20

25

-23

-14

0

+38

生育ステージ

【作業目安】

種子消毒
(温湯消毒)

浸種開始

4月3日

催芽

4月13日

播種

4月15日

播種量の目安:140g/箱

育苗日数は
20日程度

田植え
5月5日~

中干し開始
6月5日~

最高分けつ期
6月25日

1回目穂肥
7月5日

2回目穂肥
7月14日

出穂期
7月28日

収穫期
9月4日~

《稚苗の規格》

草丈 12.0cm

葉齢 2.0~2.3葉

第1葉鞘長 4.0cm

*こしいぶきは、苗が伸びにくい→
緑化終了時の苗丈めやす: 4cm

60本 12cm

m²茎数

草丈

葉色

340本

30cm

560本

530本

40~45cm

55~60cm

80cm

420本

m²穂数 420本

穂長 80cm

病害虫防除の徹底(紋枯病・いもち病・カメムシ)

的確な生育診断による適切な穂肥施用

気象予報と出穂以降の積算温度
にもとづく「刈取計画の策定」

全ほ場で溝切り

病害虫防除

【いもち病予防】
ブーンパディート箱粒剤
播種時~移植当日

除草剤散布

“補植苗”を
早期に撤去する

6月中旬~
葉いもち病
早期発見
早期防除

【紋枯病防除】
バリダシン剤(収穫14日前まで)
穂ばらみ期~出穂期

【カメムシ防除】
スタークル剤
穂ぞろい期

稲わら秋すき込み

水管理

・田植え後→3~4cmのやや深水で植え傷み回避
・活着後→2~3cmのやや浅水で早期分けつ促進
・除草剤散布時→湛水状態(水深5~6cm)で散布
・中干し開始まで→浅水更新でワキの発生防止

やや深水

一時湛水

浅水更新

生育量を把握して遅れずに!!
小ヒビが入る程度になったら終了

中干し・溝切り

飽水管理の継続 ⇄ タメ水厳禁
(異常高温時には一時湛水)

フェーンの発生時: 地域の水利条件等に応じた
夜間水温を下げるこまめな水管理の徹底

出穂後25日以降に
最終かん水を実施!

落水期

栽培管理のポイント

Point 1

~適正な作業計画の策定により
健苗を育成します~

① 播種計画の策定~適期播種、適正な播種量、育苗期間20日程度で健苗を育成

② 土壌診断結果にもとづく土づくり資材(有機質・ケイ酸)の施用

③ 作土深15cmの確保~ほ場条件に応じた適正量の基肥施肥
→基肥N施肥量のめやす: 植壤土「3.0kg~4.0kg/10a」、砂壤土・黒ボク土「4.0kg/10a」

Point 2

~適期田植えて
初期生育を確保します~

① 移植前追肥(べんとう肥)の施用
→活着・初期生育を促進

② 田植期のめやすは5月5日
・栽植密度: 60株/坪
・植付本数: 3~4本/株
・植付深さ: 2~3cmの浅植え

③ いもち病の発生しやすい地域・ほ場では予防防除(箱施用剤)を徹底
→補植苗を速やかに撤去

Point 3

~生育状況にあわせた生育調節で
過剰生育を抑制します~

① 目標穂数の80%(340本/mi=1株あたり19本)を確保してから→適期中干し開始

② 全ほ場で溝切り(10条: 3mに1本)→速やかなかん水・排水管理

③ 本格的な梅雨入り前にしっかり地固め→中干しは小ヒビが入る程度になったら終了~遅くとも出穂30日前までに飽水管理へ移行

Point 4

~病害虫防除と水管理の徹底で
稲体機能を維持します~

① いもち病・紋枯病の早期発見~早期防除(こまめにほ場巡回)

② 中干し以降は、田面が強く乾くことのないよう飽水管理を継続(強い中干し・タメ水→厳禁)

③ 出穂後25日以降に最終かん水を入水(落水は出穂28日以降)~異常高温時には、速やかに一時湛水~高温障害を防止

Point 5

~適切な生育診断による穂肥施用
品質・収量を確保します~

① 穂肥は出穂23日前(遅れずに施肥→籾数確保)と14日前の2回に分けて施用→1回あたりの施肥量はN: 1.5~2.0kg/1回、合計3.0~4.0kg/10aを目安とする

② 2回目の穂肥は確実に施用する

③ 出穂期の葉色低下や登熟期間の異常高温が予想される場合、3回目穂肥として出穂3日前までに N: 1.0kg/10aを追加施肥する

Point 6

~適期刈取、適切な作業により
高品質米に仕上げます~

① 出穂後の積算気温: 975℃を参考に籾の黄化率(85~90%)を確認して適期に収穫する→異常高温が予想される場合には早めの収穫を検討する

② 穂発芽性は「やや易」→刈り遅れに注意する

③ 収穫後は早めに土づくり資材の投入+稲わらの秋すき込み

《施肥のめやす》 (成分 kg/10a)

区分	時期	N成分	備考
土づくり	収穫後~耕起前	—	稲わら秋すき込み 有機質・けい酸質資材
基肥	耕起前~田植え	3.0~4.0	地力に応じて
穂肥1	出穂23日前	1.5~2.0	遅れずに施肥~籾数確保
穂肥2	出穂14日前	1.5~2.0	しっかり施肥~登熟向上
合計	—	6.0~8.0	*一発基肥トータル N: 7.0~7.5kg

《生育のめやす》

生育ステージ	時期	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉色 (SPAD)
1回目穂肥	7/5	55~60	530	35~37
2回目穂肥	7/14	—	—	35~36
出穂期	7/28	80 (穂長)	420 (穂数)	34

《品質向上・収量確保目標》

玄米1等級比率	90%以上
10a当たり収量	570kg

《品種特性》

早晩性	耐倒伏性	葉いもち	穂いもち	紋枯病
早生	やや強	中	中	弱

《収量構成要素》

収量 (kg/10a)	1穂籾数 (粒)	穂数 (本/m ²)	m ² 籾数 (百粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)
570	70	420	290	90%	22.0